



第1章 沼津市の概要

第1節 自然的・地理的環境

1 市の位置と面積

【静岡県東部の中心】

本市は東京都心から100キロメートル圏内にあり、静岡県の東部地域に位置します。地理的には広大な富士山麓の南東、伊豆半島の西側付け根にあたることから、伊豆方面への交通拠点として発達し、広域的な商業・文化拠点として、この地域の政治、経済、文化の中心的役割を担ってきました。

本市は西側を富士市、北側を長泉町、東側を清水町・三島市・函南町・伊豆の国市、南側を伊豆市と接しています。市域は東西約15キロメートル、南北約30キロメートルに広がり、面積は186.82平方キロメートルを有しています。

本計画における市内の地域区分は、第5次沼津市総合計画の区分を、歴史的背景を考慮し一部編集しています。なお、地区は中学校区を基本的な枠組みとする区分を設定していますが、長井崎校区のみ地域性を考慮し内浦・西浦地区に分けて示しています。

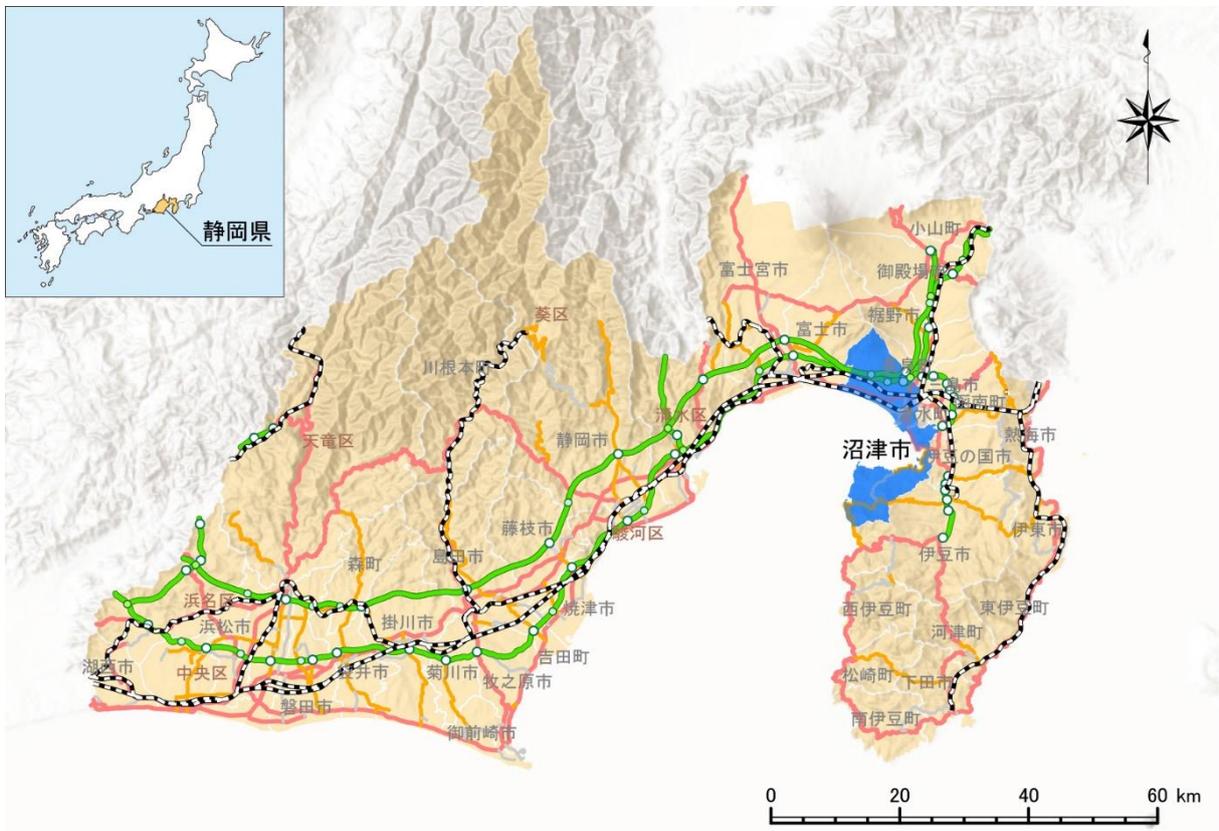


図5 沼津市の位置

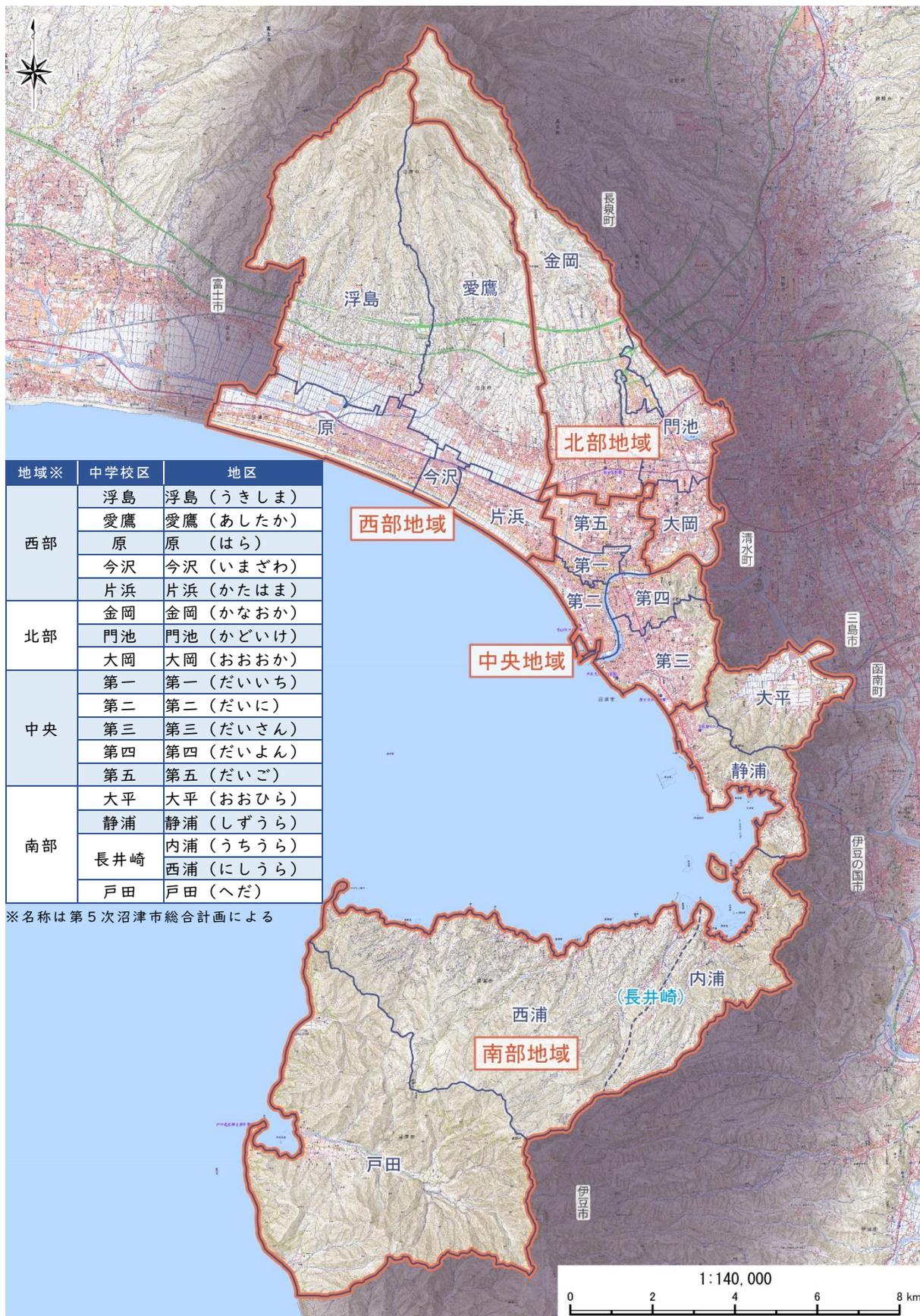


図6 沼津市の地域・地区区分 (国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成)

- 序章
- 第1章
- 第2章
- 第3章
- 第4章
- 第5章
- 第6章
- 第7章
- 第8章
- 資料集



2 地形・地質・水系

(1) 地形

【火山と駿河湾に囲まれた地形】

市域は、北部・西部地域の愛鷹山^{あしたか}や南部地域の達磨山^{だるまやま}山系など、緑豊かな山々に囲まれています。また西側は駿河湾に面しており、北岸の千本浜海岸^{せんぼんはまかいがん}などの弧状に続く海岸から内浦湾より南の複雑に入り組んだ海岸まで、約63キロメートルにも及ぶ変化に富んだ美しい海岸線を有しています。

愛鷹山は愛鷹火山によって形成された山地の一部です。傾斜が急な山ですが、南東斜面は新しい時期に噴出した溶岩流によって他より緩やかな地形の丘陵地となっており、旧石器時代から人の居住が認められ、現代でも宅地や工業地などの開発が進んでいます。中央地域に位置する香貫山^{かぬきやま}から南部地域の発端丈山^{ほったんじょうざん}は静浦山地と呼ばれ、起伏が激しく急傾斜な山地を形成しています。さらに、南部地域には達磨山などの火山からなる急峻な山地が続いています。こうした山地を河川が浸食し、海岸付近に小さな沖積平野が形成され、人が居住してきました。

沼津駅周辺の中心市街地は、黄瀬川^{きせがわ}扇状地^{せんじょうち}という富士火山^{ふじかざん}を起源とする火山性砂礫^{されき}が厚く堆積する扇状地上^{せんじょうち}に立地しています。市の中心部を流れて駿河湾に注ぐ狩野川^{かのがわ}は、多量の土砂を運び河口左岸に砂浜を形成しました。一方、狩野川河口付近から富士市吉原までは、20キロメートル以上にわたって緩やかな弧状の海岸線を形成しています。松林が美しいこの海岸は千本浜海岸とよばれ、主に富士川^{ふじがわ}を起源とする砂礫^{されき}が駿河湾の海流や風によって運ばれて堆積した結果、砂礫州^{されきす}となって陸地化したものです。この砂礫州の後背には、かつて浮島沼^{うきしまぬま}という広大な湖沼があり、現在は浮島低地が広がっています。

静浦から西浦地区にかけては山地が海に迫った複雑な海岸線を形作っています。さらに西浦の大瀬崎^{おせざき}から戸田にかけての海岸線は、駿河湾の海流の影響を大きく受け、山肌が削られた断崖が続いており、河川の河口付近などに御浜岬^{みはみさき}のような砂嘴^{さし}が発達しました。

長い海岸線に接する駿河湾は水深2,400メートルにも達する日本一深い湾です。内浦湾は大陸棚と呼ばれる比較的浅い海域ですが、千本浜海岸や戸田の沖合の海底は、大陸棚がほとんどない海域で、急激に水深が深くなる地形です。特に戸田では海岸から数百メートルで水深200メートルの深海に至り、5キロメートル沖合で水深1,000メートル、10キロメートル沖合で水深1,400メートルに達するほどです。



市街地から伊豆半島を望む

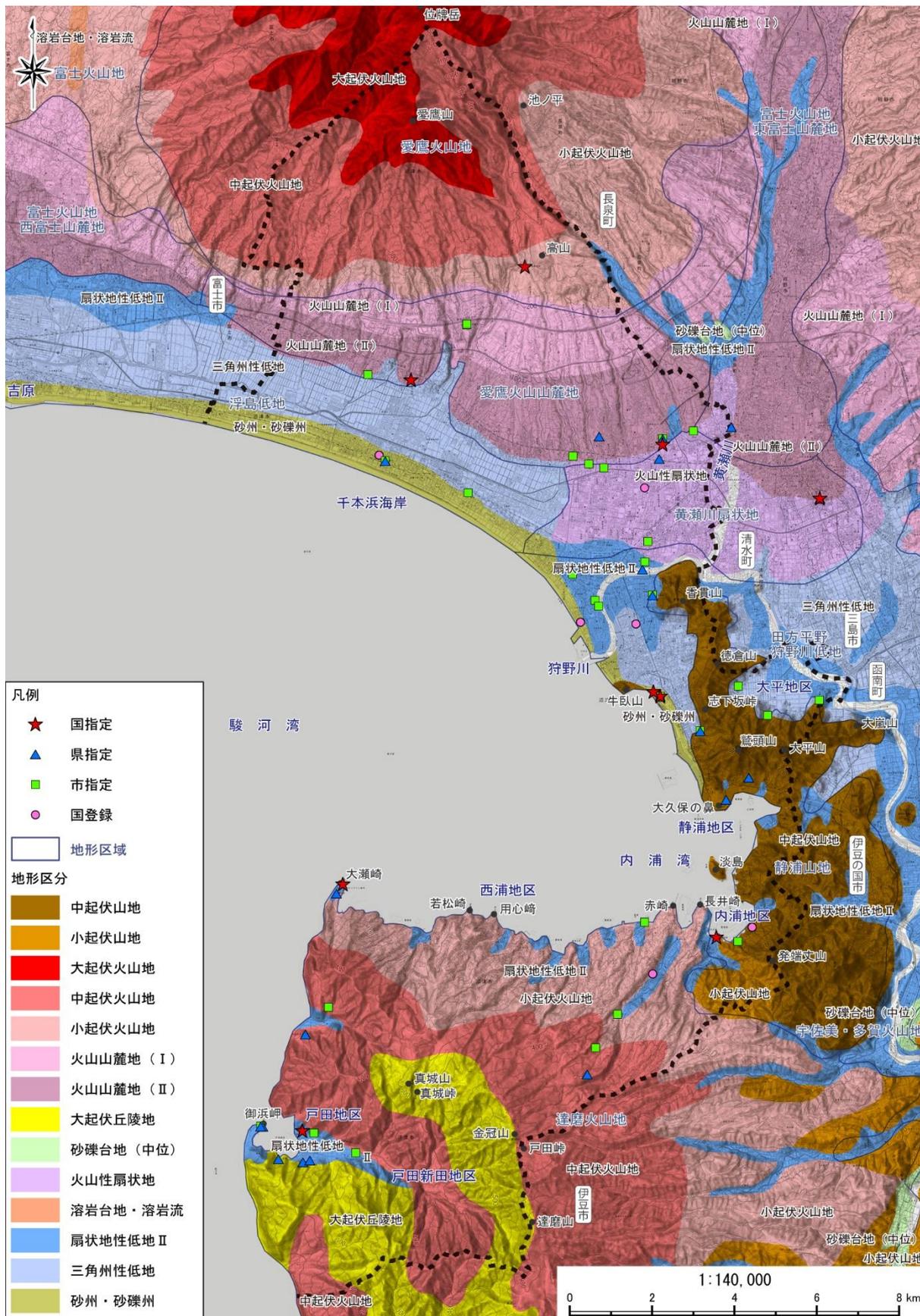


図7 沼津市の地形 (国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成)

- 序章
- 第1章
- 第2章
- 第3章
- 第4章
- 第5章
- 第6章
- 第7章
- 第8章
- 資料集



(2) 地質

【山地は岩盤と火山灰土、平地には砂礫・泥が堆積】

北部・西部地域の愛鷹山には、愛鷹火山由来の溶岩からなる基盤の上に富士火山などの火山灰が堆積してできたローム層（愛鷹ローム層）が形成されており、河川による開析が進んだ場所では愛鷹火山の基盤である安山岩質・玄武岩質の岩盤が露出しています。

中央地域から南部地域にかけての静浦山地は、主に海底火山由来の凝灰岩質の岩盤を安山岩質または流紋岩質（デイサイト質）の貫入岩体が貫いており、質の異なる2種類の岩石が入り組んでいます。淡島や牛臥山は海底火山の基盤が露出したもので、後者の岩石で成り立っています。

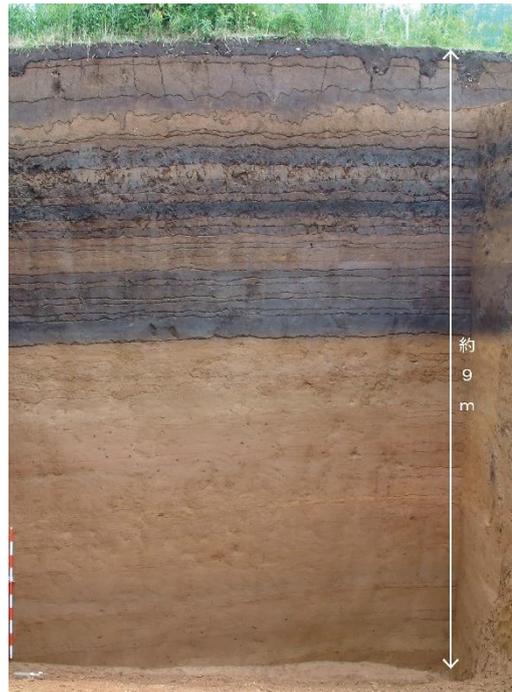
南部地域の達磨山も達磨火山由来の安山岩質・玄武岩質の基盤の上にローム層が形成され、海岸では海の浸食により岩盤が露出し、大瀬崎では火山の火口跡の断面が観察できます。また、新田《戸田》には、達磨火山の基底部分にあたる緑色凝灰岩が露出している部分があります。このように本市の広い範囲に岩盤があり、本市とその周辺で採掘される石は伊豆石と総称されています。

沼津駅周辺の中心市街地が立地する黄瀬川扇状地は、御殿場泥流堆積物という2千数百年前に流下した富士火山起源の火山性砂礫が、礫（火山礫や川原石など）を巻き込み互層を成して厚く堆積しています。この地域の礫が多い地質の特徴をよく表す地名として、黄瀬川の西側地域には、戦国時代の古文書にも見られる「石田」《大岡》という地名が現在も残っています。

千本浜海岸は主に富士川起源の砂礫が厚く堆積し、後背の浮島低地には泥や腐植土が堆積しています。



(左) 市街地上空から愛鷹山・富士山を望む



(右) 愛鷹ローム層の断面

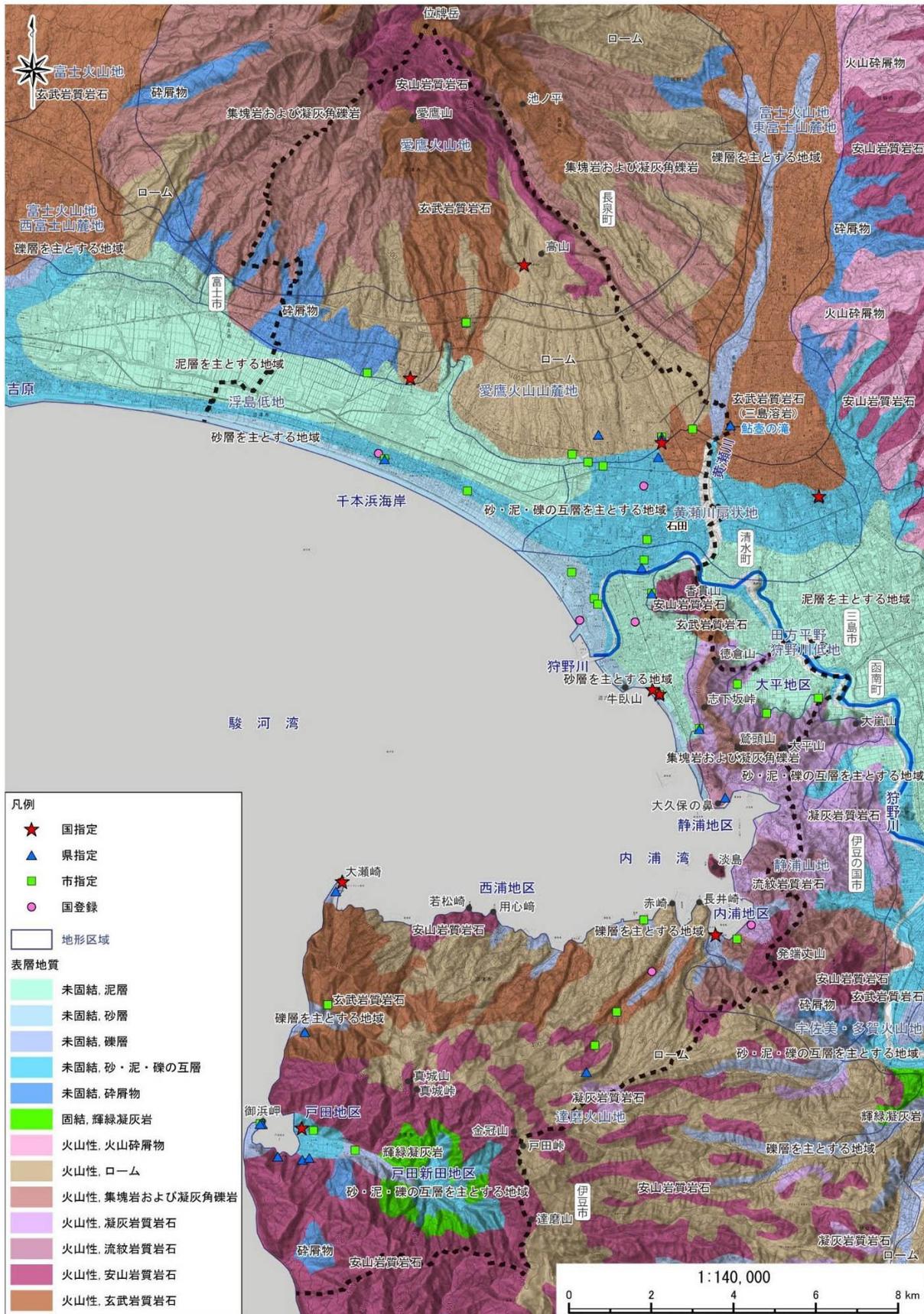


図8 沼津市の地質（国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成）

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

資料集



(3) 水系

【狩野川水系と沼川水系、南部は山から直接駿河湾に注ぐ小河川】

中央地域を流れる狩野川は伊豆^{あまぎざん}天城山を源とする延長46キロメートルにもなる河川です。伊豆半島中央部を北上し本市の東部で富士山東麓を流れる黄瀬川と合流して市街地を通り、沼津港付近で駿河湾に注いでいます。昭和33年（1958）の狩野川台風では流域に大きな浸水被害がありました。その教訓から、堤防の整備に加え伊豆の国市から静浦地区の^{くちの}口野にトンネルを掘削して放水路を建設し、大雨の際は狩野川中流から直接駿河湾へ放水できるようになりました。

西部地域には^{うきしまていち}浮島低地（旧浮島沼低地）を西に向かって流れる^{ぬまかわ}沼川があります。愛鷹山麓の多くの河川はこの沼川に注いだのち西へと流れ、富士市の^{たご}田子の^{うら}浦で駿河湾に注いでいます。沼川周辺は昔から滞水による水害が多い場所でしたが、放水路の建設により、直接駿河湾へ排水できるようになりました。

南部地域は山地が海に迫っているため、延長の短い複数の河川が直接駿河湾に注いでいます。比較的長い河川として、^{おおかわ}大川《^{うら}戸田》、^{いた おおかわ}井田大川、^{にしうらこうちがわ}西浦河内川があります。



狩野川（市街地から東を望む）



浮島低地と沼川



3 気候

【冬でも比較的温暖で年間降雨量が多い】

本市は年間を通じて温暖な気候に恵まれた地域です。平成28年(2016)から令和4年(2022)までの7か年の沼津南消防署の気象データ(『消防年報』平成28年～令和4年(駿東伊豆消防本部、平成29年～令和5年)より)によれば、年間の平均気温は17.1℃(7か年平均)で、夏冬の気温差が小さく、比較的過ごしやすい気候となっています。降雨量は1,741.3ミリメートル(7か年平均)となっており、6月から7月の梅雨の時期や9月から10月の秋雨・台風シーズンは特に雨量が多くなっています。

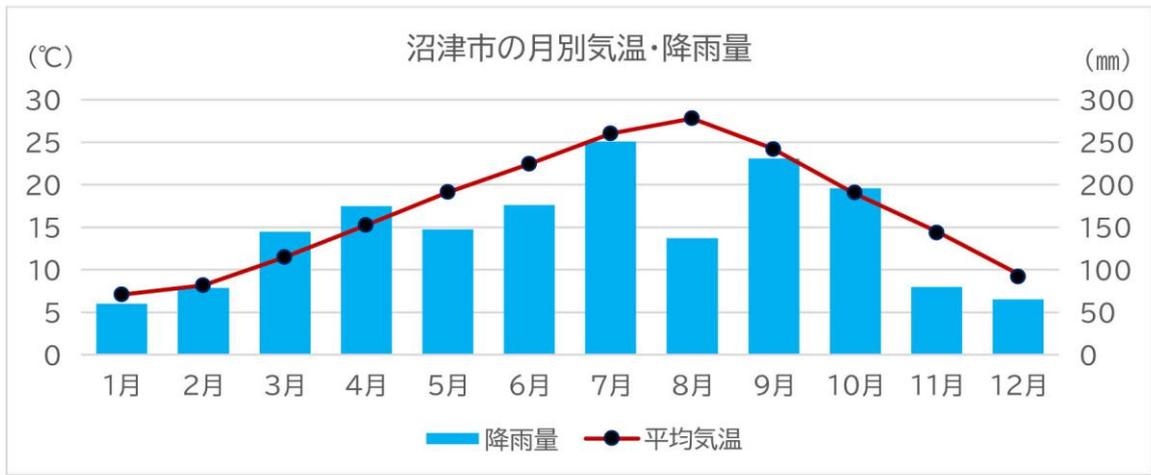


図10 沼津市の月別気温・降雨量

表13 沼津市の降雨量

月平均気温と降雨量 (H28～R4)

月	平均気温	平均降雨量
1月	7.1℃	60.2mm
2月	8.1℃	78.6mm
3月	11.5℃	144.7mm
4月	15.2℃	174.8mm
5月	19.4℃	147.1mm
6月	22.5℃	175.7mm
7月	26.0℃	250.7mm
8月	27.8℃	137.3mm
9月	24.6℃	231.1mm
10月	19.4℃	195.8mm
11月	14.6℃	79.9mm
12月	9.5℃	65.3mm
月平均	17.1℃	145.1mm

年平均気温と降雨量の変遷 (H28～R4)

年次	平均気温	降雨量
平成28年	17.1℃	1,756.0mm
平成29年	16.4℃	1,459.0mm
平成30年	17.3℃	1,729.0mm
令和元年	17.3℃	1,708.0mm
令和2年	17.5℃	2,086.0mm
令和3年	17.3℃	1,815.5mm
令和4年	17.1℃	1,633.5mm
年平均	17.1℃	1,741.3mm

出典：『消防年報』（平成28年版～令和4年版）、『第2次沼津市緑の基本計画』



また、風向きは、狩野川河口付近のデータ（図11）によれば、駿河湾側から吹く西寄りの風と、箱根方面から吹く東の風が卓越しています。特に西南西・南西の風は平均風速12m/s以上の強風の頻度が高く、冬季に強い西寄りの季節風が吹きつけています。

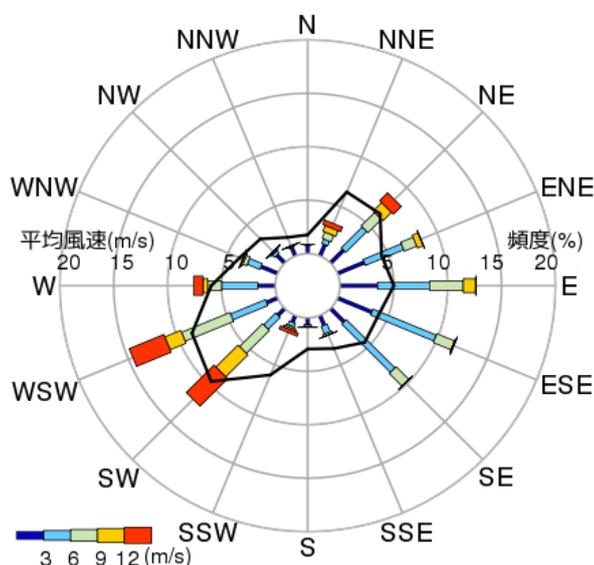
なお、日照時間は、隣接する三島市にある気象台の観測データによると年間2,000時間を超えており、全国的に見れば日照時間は長い地域です。このように温暖で雨量や日照時間が多いことから、樹木や農作物の生育に適した気候であるといえます。

月別平均日照時間

観測期間	平均日照時間
1月	186.3h
2月	168.1h
3月	172.2h
4月	182.2h
5月	184.8h
6月	128.9h
7月	149.7h
8月	191.0h
9月	151.2h
10月	149.4h
11月	160.1h
12月	179.4h
合計	2,003.2h

風配図

本図は年間の風向及び風速の頻度を表しています。棒グラフの高さは風向の頻度を示し、色の違いは風速ごとの頻度を表します。また、折れ線は平均風速を示しています。



左：表14 静岡地方気象台三島測候所の月別平均日照時間（1991～2020） 出典：気象庁HP
 右：図11 狩野川河口100m沖合付近高度60mの風配図（H7～26年の20か年平均）
 出典：「NEDO NeoWins洋上風況マップ」



4 生態系

(1) 植物

【地形や環境に応じた植生と湿地の貴重な植物】

本市では、山地や低地、河川、海岸などの多様な地形を有し、海岸部の温暖な地域から愛鷹山山頂部の冷涼な山地までの広い気候環境があることから、これに応じた植生が分布しています。市域の大半を占める山地には山林が広く分布しますが、愛鷹山の標高1,000メートル以上はブナなど落葉広葉樹が自然林



千本浜海岸（千本松原）

をつくっており、それより下ではスギなどの植林された針葉樹林が広がり、麓ではクスノキやシイなど薪炭材等として利用されてきた常緑広葉樹が分布しています。

かつて浮島沼があった浮島低地では、ヨシなどの湿地植物や水生植物が生育し、サワトラノオやヒキノカサは、県内唯一の自生地となっています。この低地の前面の海岸部には千本松原と呼ばれる植林されたクロマツ林が広がっています。南部地域には、海岸性の植生であるウバメガシ群落やトベラ群落が広く見られ、西浦から戸田地区にかけての山地にはスギなどの植林された針葉樹が広く分布しています。また、沿岸部にはジャクシンやイヌマキも多く見られます。

このように市内には2,368種の植物（令和3年3月時点、第2次沼津市環境基本計画より）が確認されています。このうち、「静岡県レッドリスト2020」と「環境省レッドリスト2020」に、合計186種が絶滅の可能性がある植物として示されています。



西浦の針葉樹



(2) 動物

【国立公園などで貴重な動物保護】

愛鷹山、浮島低地、狩野川、奥駿河湾沿岸などが野生動物の重要生息地となっており、富士箱根伊豆国立公園、愛鷹山自然環境保全地域、小鷲頭山野鳥保護区、鳥獣保護区などの指定によって生息保護が行われています。

哺乳類は大型のツキノワグマやニホンジカ、中型のキツネやタヌキ、小型のネズミやモグラ類などの25種が確認されています。かつては愛鷹山には野生化したウマがいましたが、現在は生息していません。

鳥類はアオゲラやメジロなどの周年観察できる鳥のほか、夏鳥・冬鳥などの渡り鳥が市域で観察できます。愛鷹山などの山地にはタカ類が生息し、川や池は越冬のため飛来したカモで賑わっています。海にはユリカモメが飛び交い、海岸にはサギやカワウが生息しています。特に浮島沼のあった低地帯は野鳥観察地として知られ、原地区の西部浄化センター近くには、冬季に百数十種類に及ぶ野鳥が集結するといわれています。また、この付近のアシ原は全国有数のツバメのねぐらとしても知られています。

河川・湖・海域には多種の魚類が生息しています。特に駿河湾沿岸にはタイやアジ、ボラやタチウオなど豊富な魚類が生息し、かつては大量のマグロなどの大型魚が内浦・西浦地区沿岸に回遊していました。さらに、湾として日本一の深さを誇る駿河湾の深海には、アオメエソ（メヒカリ・トロボッチとも）やニギス（メギス）、サケガシラなどの魚類や、世界最大のカニであるタカアシガニやアカザエビなどの深海生



タカアシガニ

物も生息しています。希少なものとして内浦湾に生息しているエダミドリイシの造礁サンゴなどがあげられます。また、牛臥海岸や我入道海岸などではアカウミガメの産卵が報告されています。

このように市内では、1,047種（哺乳類25種、鳥類275種、爬虫類16種、両生類12種、魚類321種、昆虫類129種、貝類78種、甲殻類などその他の動物191種）の動物の生息が確認されています（令和3年3月時点、「第2次沼津市環境基本計画」より）。このうち、「静岡県レッドリスト2020」と「環境省レッドリスト2020」に、合計182種が絶滅の可能性のある動物として示されています。



5 景観

【富士山の眺望と松林、石が多用されたまちなみ】

市域からは日本一の標高を誇る富士山を望むことができます。特に市の西部地域では浮島沼があった低地の水田地帯から、茶畑が広がる愛鷹山越しに、霊峰富士を望むことができます。また、南部地域からは駿河湾越しの富士山が見られます。さらに、沼津アルプスと呼ばれる静浦山地からの眺望は、市街地と長く続く海岸線もあわせて富士山を望むことができるため、登山者に人気のスポットとなっています。



浮島低地の水田と茶畑が広がる愛鷹山越しの富士

富士市との市境から狩野川河口まで、弧状に海岸線が伸びる千本浜海岸には、クロマツが防風のために植林され、その数が多いことから千本松原と呼ばれています。クロマツ林は狩野川河口より南側の海岸にも分布しており、海岸と松林の織り成す美しい景観は、近代に別荘地として注目され、松林の周辺には沼津御用邸をはじめとした別荘が数多く建てられました。また、アシなどが茂る浮島沼の低地越しの富士山や、東海道沿いの松並木の先に富士山がみえる眺望は、浮世絵の東海道五十三次「原」にも描かれており、この地域の代表的な景観として知られています。さらに、千本浜海岸から対岸の南部地域を望むと、針葉樹が植林された広大な達磨山山系と入り組んだ湾に漁村が点在する景観を見ることができます。

南部地域では入り組んだ海岸の地形が変化に富んだ景観を作り出し、景勝地・別荘地として近代以降に人気となりました。現在、湾内の各所には魚類の養殖の生簀が見られ、生簀の浮かぶ海越しに富士山が見られます。

市街地では大火や戦災、都市化によって古いまちなみはほとんど失われてしまいましたが、中心市街地を流れる狩野川右岸沿いには、河岸の面影を伝える区割りや蔵などが今でも残っています。また、内浦や西浦地区には古いまちなみが残っているところもあります。こうしたまちなみで特徴的なのが、南部地域から産出する石材（伊豆石）を利用した石蔵や石積みの建造物です。伊豆石は地域特産のみかん畑の石垣や、戸田の住宅を強い西風から守る石垣、棚田の石垣にも利用されるなど、地域の地質資源が生活に活かされた景観を見ることができます。



第2節 社会的環境

1 市域の変遷

【大正12年に市制始まる】

明治12年（1879）、江戸時代の宿町村を最小行政単位とした郡区町村編制法が始まり、駿東郡役所が沼津町におかれ
ました。明治22年（1889）には町村制が施行されて、現在の市域には駿東郡沼津町を始めとする全13の町と村が成立
しました。大正12年（1923）7月1日には沼津町と楊原村が合併し、沼津市が誕生しました。

その後、昭和19年（1944）に沼津市は片浜・金岡・大岡・静浦の4村と合併しました。昭和30年（1955）には沼津市は愛鷹・大平・内浦・西浦の4村と合併、原町は浮島村と合併しました。昭和43年（1968）には沼津市と原町が合併し、人口は約18万人に達しました。その後、平成17年（2005）に戸田村と合併し、現在に至っています。



図12 明治22年の沼津市域

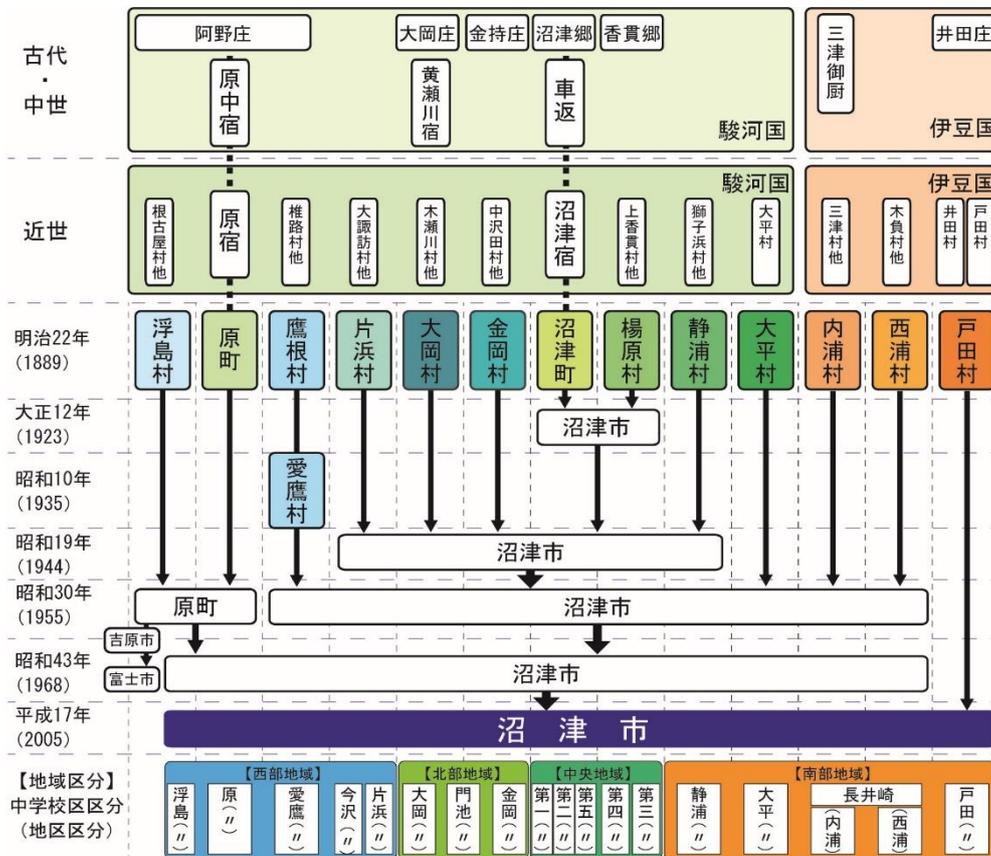


図13 沼津市域の変遷

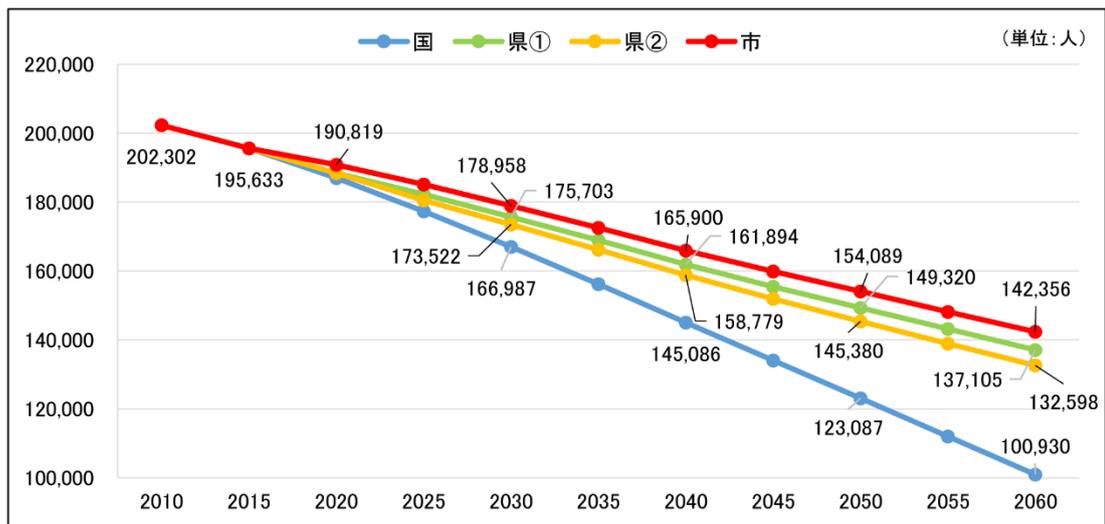


2 人口動態

【人口減少と少子高齢化が進行】

本市の人口は、住民基本台帳（令和6年（2024）3月末現在）によると186,676人で、県内市町では4番目の規模となっています。その内訳は、男性が92,065人、女性が94,611人となっており、外国人は5,019人です。人口を5年ごとの推移で見ると、1995年にピークに達し、以後減少に転じています。人口の推移を自然動態と社会動態で見ると、自然動態では、2005年から自然減（死亡数が出生数を上回る）に転じ、以後も減少幅は拡大しています。一方、社会動態では、1971年から社会減（転出が転入を上回る）の状態が続いていましたが、近年は徐々に減少幅が縮小し、2019年には社会増に転じました。

本市の将来の人口は、国立社会保障・人口問題研究所によれば、2030年には166,987人、2040年には145,086人と推計され、今後もより少子高齢化が進行することが予想されます。本市では、将来にわたり本市の活力を保つために、様々な分析を踏まえ、今後の人口減少の抑制を目指して、今後目標とすべき人口（将来展望）を図14のように設定しており、将来展望では2060年に143,000人程度の人口を確保することを目標としています。



（国）国立社会保障・人口問題研究所が「日本の地域別将来推計人口（2018年推計）」で示した推計方式に準拠し、期間を2060年まで延長したもの。合計特殊出生率及び社会増減（移動率）は最近の傾向が今後も続くと仮定。

（県①）合計特殊出生率が2035年以降人口を長期的に一定に保てる水準の2.07となり、かつ社会動態が2025年に±0、その後持続した場合を仮定。

（県②）合計特殊出生率が2040年以降人口を長期的に一定に保てる水準の2.07となり、かつ社会動態が2030年に±0、その後持続した場合を仮定。

（市）合計特殊出生率が2025年に1.8、その後2035年までに2.07へ徐々に上昇し、かつ社会動態が2020年に±0となり、その後持続した場合を仮定。

図14 本市の人口の将来展望 出典：「沼津市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン」



3 産業

【商業・工業中心だが漁業・農業も盛ん】

令和2年度（2020）における産業別就業人口は、第3次産業が66.7%（56,262人）を占め、第2次産業が28.5%（24,076人）、第1次産業はわずか2.5%（2,115人）となっています。産業別就業人口の内訳では、製造業（22.1%）が最も多く、次いで卸売・小売業（16.8%）、医療・福祉（11.6%）の順となっています。

第1次産業のうち農業では、愛鷹山麓の茶、内浦・西浦及び戸田地区のみかん栽培が盛んです。水産業は沿岸漁業、養殖漁業、水産加工業が中心で、「あじのひもの」と「さば雑節」は全国有数の生産量を誇ります。第2次産業では、大手の工作機械、電気機械メーカーをはじめ多様な形態の中小企業が立地しています。第3次産業では、官公庁施設や民間企業の支店などの集積が地域経済を支え、宿泊業などの観光関連業も重きをなしています。

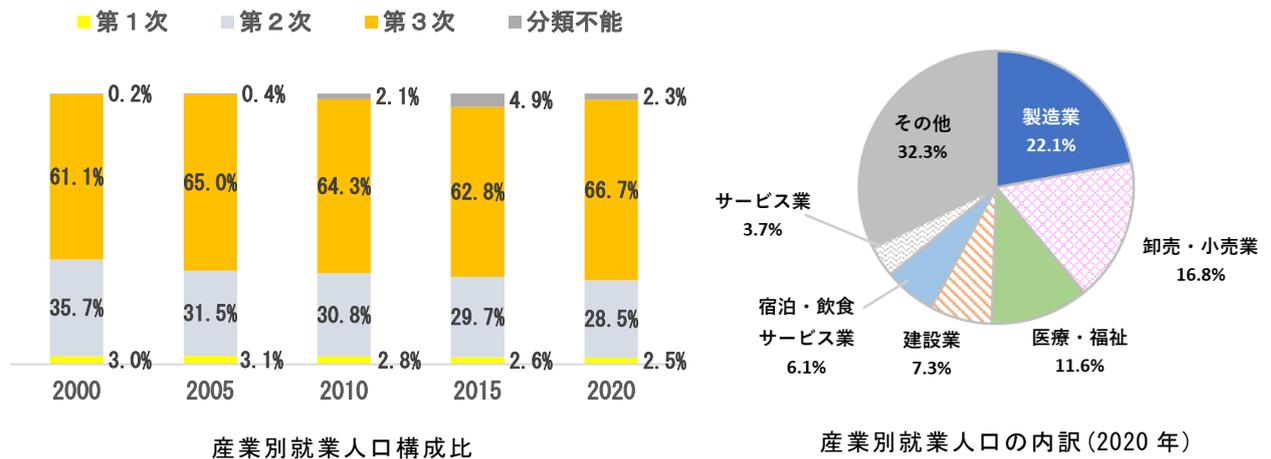


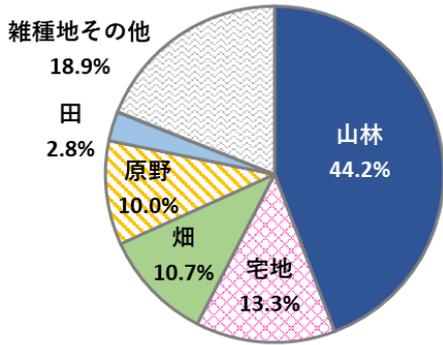
図15 産業別就業人口構成比と内訳 出典：「令和2年国勢調査 地方集計結果」

4 土地利用

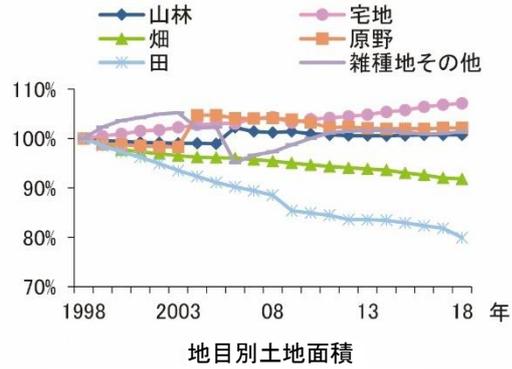
【山林が大部分を占め、農地は宅地転用が進む】

本市は北と南に大きな山地を控えているため、平地は多くありません。令和4年（2022）の地目別土地面積をみると、山林（44.2%）が最も多く、次いで宅地（13.3%）、畑（10.7%）、原野（10.0%）となっています。愛鷹山麓や達磨山山系の一部では林業が営まれており、植林されたスギなどの針葉樹の山林が多く見られます。山麓は、茶畑やミカン栽培などで畑に使用されています。低地は宅地や田として利用されていますが、愛鷹山の傾斜の緩い南東山麓でも、近年畑から宅地としての利用が増加傾向にあります。

また、平成10年（1998）の面積を100とした場合の推移は、宅地が増加する一方で、田及び畑は減少しており、市域全体としては農地の宅地転用等が進んでいます。



地目別土地面積の内訳 (2022年)



注) 1998(平成10)年を100とした場合

【資料:沼津市統計書】

図16 地目別土地面積と内訳 出典:「第2次沼津市環境基本計画」

5 交通機関

【日本の大動脈が市域を横切る】

本市には日本の東西を結ぶ大きな交通インフラが通っています。道路では、東京と大阪を結ぶ国道1号、御殿場方面を経由して東京へ通じる国道246号、下田方面へ通じる国道414号が走っています。高速道路は東名高速道路、新東名高速道路が市域を東西に横切り、沼津インターチェンジ、長泉沼津インターチェンジのほか愛鷹スマートインターチェンジ、駿河湾沼津スマートインターチェンジがあります。高速道路は、伊豆縦貫自動車道と接続し、伊豆方面への玄関口となっています。また、近世以前から主要な街道であった東海道は県道東柏原沼津線(県道163号)など、根方街道は主要地方道三島富士線(県道22号)として、現在も引き継がれています。

鉄道は東海道本線が市内を走っており、御殿場線が沼津駅に接続しています。JRの駅は、沼津駅、片浜駅、原駅、大岡駅の4駅があります。東海道新幹線は、隣接する三島市・長泉町にまたがって三島駅があります。

バスは首都圏への直通高速バスが運行されています。路線バスは、富士急シティバス(株)、(株)東海バス、伊豆箱根バス(株)の3社により運行されており、コミュニティバスやデマンドバスを運行している地域もあります。

海上交通は、江戸時代には東海道沼津宿の河岸と江尻宿(静岡市清水区)の清水湊を結ぶ船便が盛んで、戦後は沼津港と戸田港を結ぶ船便もありましたが、現在では期間限定の船便のほか、観光用として我入道の渡し船や沼津港・内浦湾の遊覧船などの運航にとどまっています。



JR沼津駅周辺



図17 交通体系図（国土地理院発行2.5万分の1地形図を加工して作成）

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

資料集



6 観光

【観光地伊豆の玄関口】

本市は首都圏に近く、国内有数の観光地伊豆・箱根・富士へアクセスしやすい地理的環境から多数の観光客が訪れています。令和2年（2020）から令和4年（2022）は新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり大幅に減少しましたが、それ以前の観光交流客数は平成29年度（2017）に462万人に達しました。風光明媚で温暖な土地柄はもとより、鮮魚と干物などの水産加工品を味わい購入できる沼津港をはじめとして、西浦地区の大瀬崎や戸田地区の御浜岬など全国屈指の透明度を誇る海水浴場、大瀬崎などのダイビング、イルカショーで有名な水族館や深海魚に特化した水族館など、沼津の海の魅力がその背景にあります。また、近年はアニメの舞台となったことで交流人口の増加につながっています。

ホテル・旅館などの宿泊施設は、中心市街地のほか内浦や西浦、戸田地区に立地しています。

表15 沼津市の観光交流の動向

年度	観光交流客数（人）	観光レクリエーション客数（人）	宿泊客数（人）
平成27年度（2015）	4,015,617	3,206,359	809,258
平成28年度（2016）	4,146,268	3,335,133	811,135
平成29年度（2017）	4,623,576	3,752,007	871,569
平成30年度（2018）	4,500,770	3,642,544	858,226
令和元年度（2019）	4,363,178	3,528,050	835,128
令和2年度（2020）	2,018,583	1,546,447	472,136
令和3年度（2021）	2,429,691	1,871,856	557,835
令和4年度（2022）	3,274,734	2,508,283	766,451

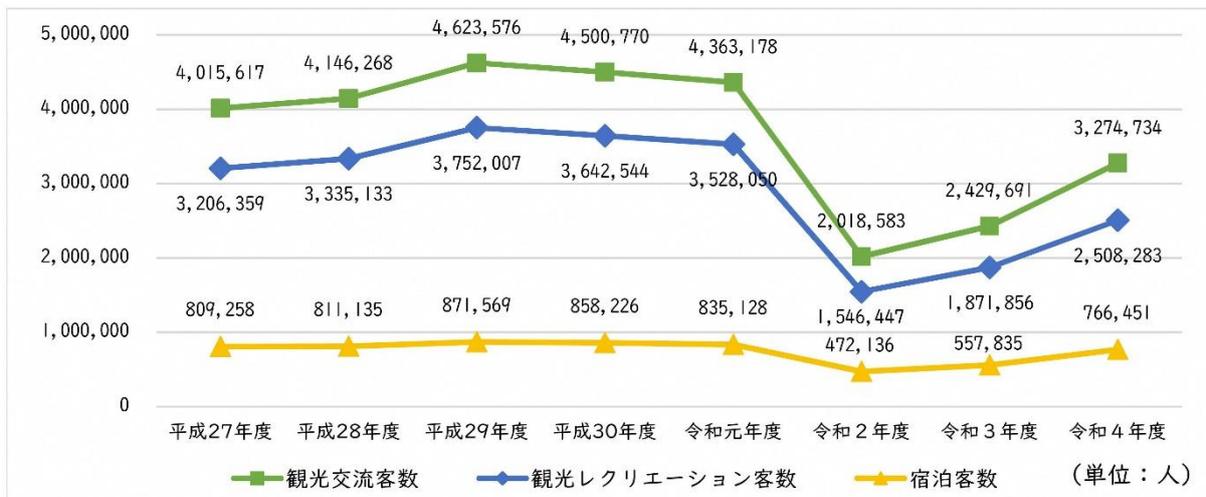


図18 沼津市の観光交流の動向 出典：「令和4年度静岡県観光交流の動向」



7 歴史文化資産に関連する施設

【歴史文化資産の保存・活用に関わる多様な施設】

本市には、歴史民俗資料館、明治史料館、戸田造船郷土資料博物館の3つの登録博物館と、博物館類似施設である芹沢光治良記念館の、あわせて4つの博物館等施設があり、本市の歴史文化資産に関する資料の収集、保存、展示、調査、研究、教育普及などを行っています。また、沼津市教育委員会事務局文化振興課に属する文化財企画係と文化財調査係の2つの係は、文化財センターにおいて本市の文化財行政の中心を担うとともに、考古資料の展示も行っています。さらに、市立図書館においては、郷土資料の収集・保存などを行っています。

このほか、歴史文化資産に関わる施設として、重要文化財松城家住宅、帯笑園、沼津御用邸記念公園などがあり、歴史文化資産の公開などを行っています。

こうした施設に加えて、若山牧水記念館では若山牧水関連資料の保存・活用、庄司美術館（モンミュゼ沼津）では美術作品などの展示、市民文化センターでは様々な芸術文化活動を行っています。

表16 沼津市の歴史文化資産に関わる施設

名称	所在地	管理運営	備考
歴史民俗資料館	沼津市下香貫島郷2802-1	沼津市	
明治史料館	沼津市西熊堂372-1	沼津市	
戸田造船郷土資料博物館	沼津市戸田2710-1	沼津市	
芹沢光治良記念館	沼津市我入道蔓陀ヶ原517-1	沼津市	
文化財センター	沼津市志下510	沼津市	文化財企画係 文化財調査係
市立図書館	沼津市三枚橋町9-1	沼津市	
市立戸田図書館	沼津市戸田845-2	沼津市	
重要文化財松城家住宅	沼津市戸田72	指定管理者	
帯笑園	沼津市原194-1	沼津市	国登録記念物 (名勝地関係)
沼津御用邸記念公園	沼津市下香貫島郷2802-1	指定管理者	国名勝旧沼津 御用邸苑地
若山牧水記念館	沼津市千本郷林1907-11	指定管理者	
庄司美術館 (モンミュゼ沼津)	沼津市本字下一丁目900-1	指定管理者	
市民文化センター	沼津市御幸町15-1	指定管理者	

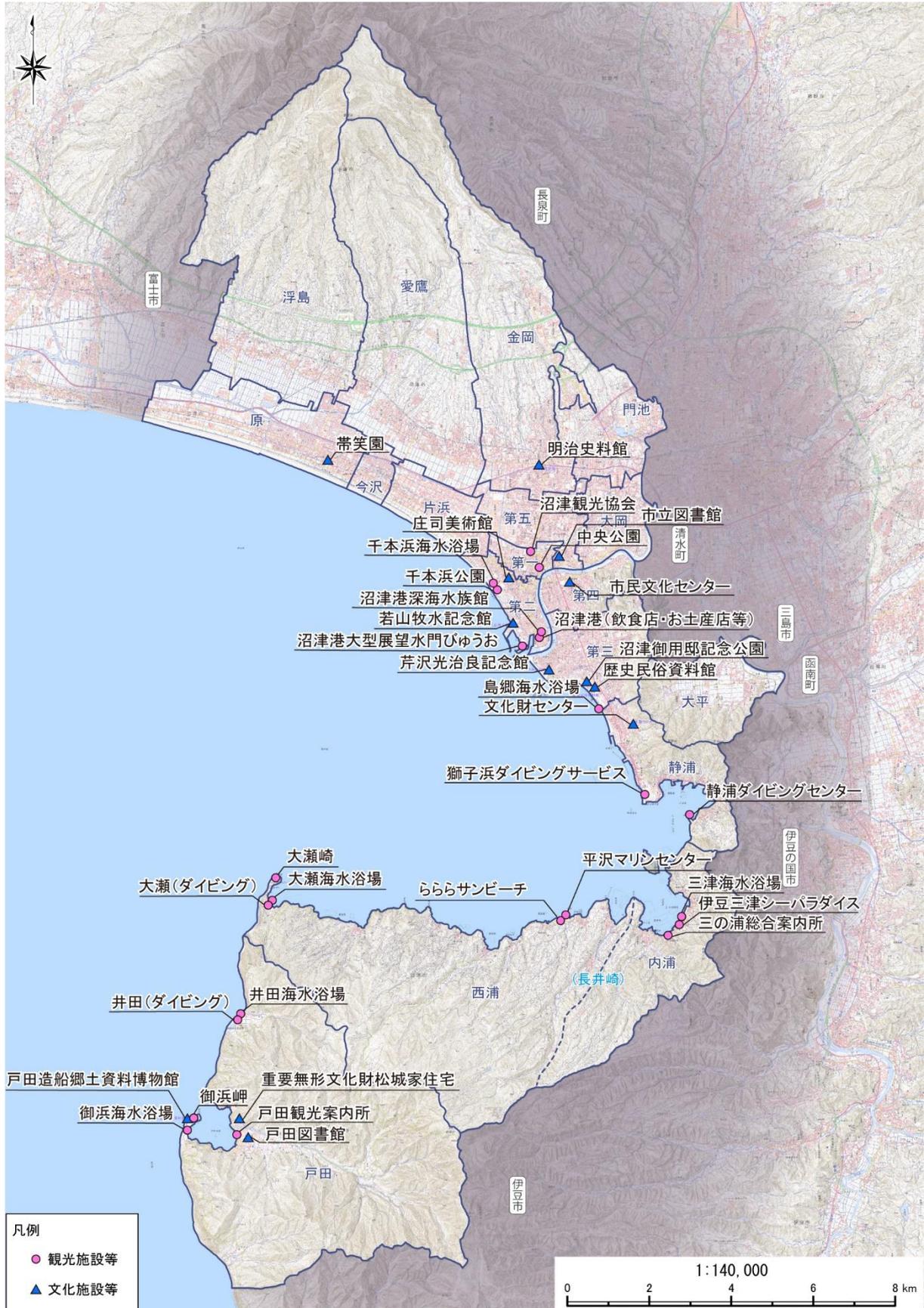


図19 観光施設と文化施設の分布（国土地理院発行2.5万分1地形図を加工して作成）



第3節 歴史的背景

1 通史的概要

歴史文化は、地形・地質に大きく影響を受けています。このため、市域の地形・地質の成り立ちを述べたうえで、本市の歴史を概説します。

(1) 地形・地質の成り立ち【伊豆半島の成り立ちと火山の歴史】

市域の地形は、北が愛鷹山の山地、中心の平地は沖積平野、中央地域から南部地域にかけては達磨山などの伊豆半島に属する山地に大まかに分類されます。伊豆半島は2,000万年前には現在の硫黄島付近にあった海底火山群で、フィリピン海プレートの北上に伴い移動し、100万年ほど前に本州に衝突し、60万年前に半島の形状になりました。西部地域は本州のプレート上に位置するため、本市は2つのプレートがぶつかる境界に位置しています。1,000万年から200万年前の伊豆半島がまだ浅い海だった頃に形成された地

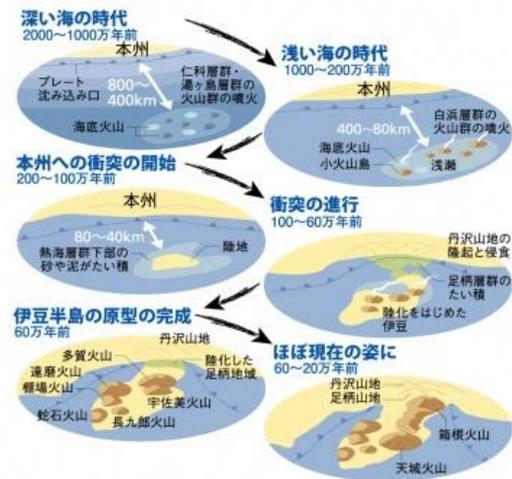


図20 伊豆半島の形成

出典：日本ジオパークネットワークHP

層を白浜層群と呼び、香貫山や徳倉山などの火山、静浦・内浦・大平地区周辺の凝灰岩質の堆積岩や貫入岩体がこの頃に形成されています。100万年前から20万年前までの地質は熱海層群と呼ばれ、大型の陸上火山が活動していた時期です。達磨山も100万年前から50万年前に噴火を繰り返した火山の1つで、多量の安山岩質のマグマを噴出しました。こうした伊豆半島の成り立ちの痕跡はジオサイトとして多数登録されています。

愛鷹山は40万年前から10万年前まで多量の溶岩を噴出して活動していた火山で、活動終了後古富士火山などの火山灰が大量に堆積してローム層を形成しました。この地層中から原始の人の活動の痕跡が見つっています。約1万年前には新富士火山から大量の溶岩が流出して、その一部は三島市まで及びました。三島溶岩とよばれるこの溶岩は、鮎壺の滝など本市と長泉町との市町境付近で見ることができます。

約6,000年前の縄文時代前期から中期は今より温暖な時期で、海進の影響で駿河湾が田方平野まで入り込み、本市の市街地の大部分はまだ海でした。その後の寒冷化にともなう海退や、約2,000年前に起きた富士山の山体崩壊、その後に度々発生した土石流や洪水により、黄瀬川を伝って多量の火山性砂礫が流下して黄瀬川扇状地が形成され、現在の市街地の土地を形成しました。

一方、西部地域の平地も縄文時代中期はまだ海であり、愛鷹山の山裾に駿河湾の波打ち際がありましたが、次第に富士川などから多量に供給される砂礫が駿河湾の沿岸流で



運ばれ山地の前面に堆積して、千本砂礫州という砂州を形成しました。縄文時代後期には完全に陸地化し、人の活動の痕跡が見られるようになります。千本砂礫州と愛鷹山の間には、低地が残る浮島沼と呼ばれる沼地が形成されましたが、近代以降放水路などの建設によって排水が進み水田化・宅地化が進んでいます。

(2) 原始（旧石器時代・縄文時代・弥生時代）【太古から続く人の営み】

現在、日本列島のうち本州に人類が到達したのが約38,000年前といわれていますが、この直後から本市における人の活動の痕跡が認められます。愛鷹山麓にある井出丸山遺跡《浮島》では、確実な資料としては本州最古級の石器が出土しています。また、土手上遺跡《金岡》で見つかった環状ブロック群は、複数の集団による石材などの交換が行われていた遺構として知られています。この時代、愛鷹山は長距離移動していた集団による交流の舞台でもありました。また、淵ヶ沢遺跡《浮島》などで陥し穴が発見され、旧石器時代では珍しい陥し穴猟が行われていたことがわかりました。旧石器時代も終りに近付くと小型の石器（細石刃）を多数組み合わせた細石器という道具を用いた狩猟が盛んになりますが、休場遺跡《愛鷹・金岡》では細石刃とともに、石囲炉が発見されています。

約16,000年前から始まる縄文時代は、土器の発明と定住化に特徴付けられます。市域では草創期から人の活動の痕跡が確認されています。葛原沢第IV遺跡《金岡》では、草創期後半の土器とともに直径3.5メートルの竪穴住居跡が発見されています。早期になると清水柳北遺跡《金岡》などがある愛鷹山の南東斜面を中心に遺跡数が急増します。前期以降、遺跡の数はだんだん減少する一方、人の活動の痕跡は市域の広い範囲に及びます。南部地域の海岸沿いに位置する長井崎遺跡《内浦》は、眼下に海を臨む丘陵上に位置する縄文時代中期の遺跡で、海上活動に関係した集落です。また、後期以降は陸地化した千本砂礫州上にも人の活動の痕跡が認められますが、寒冷化による気候変動の影響で市域全体の遺跡数が激減しています。

遺跡数の少ない状況は弥生時代前期まで続きますが、約2,000年前の弥生時代中期になると雌鹿塚遺跡《原》、雄鹿塚遺跡《原》などの浮島沼縁辺部の低地で集落が形成されました。また、同地区の中原遺跡《原》では大規模な方形周溝墓群も検出されています。

弥生時代後期になると雌鹿塚遺跡では水田稲作に関係する木製品が大量に見つかっていることから、低地では稲作が営まれていたことがわかります。一方、低地の集落は存続しつつも、愛鷹山の丘陵上に新たに大規模集落が出現することもこの時期の特徴です。この集落群は標高100



葛原沢第IV遺跡の竪穴住居跡



メートル以上の地に営まれており、畑状遺構も検出されていることから、稲作ではなく畑作が行われていたと考えられます。さらに、集落群の北限にあたる八兵衛洞遺跡《金岡》や植出北Ⅱ遺跡《金岡》では、総延長450メートルにも達する尾根と谷を横断する大規模な溝が発見されています。

(3) 古代（古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代）【スルガの中心地】

本市では弥生時代後期から遺跡数・住居跡数が増加し、古墳時代初頭（3世紀半ば）に前方後方墳の高尾山古墳《金岡》が造られました。東日本では最古級かつこの時期としては最大級の古墳です。前期後半になるとヤマト王権との結びつきが強くなり前方後円墳の神明塚古墳《片浜》・子ノ神古墳《金岡》が築かれます。しかし中期に入ると大型の古墳の築造はみられなくなります。後期になると



高尾山古墳

と前方後円墳の長塚古墳《金岡》が築かれ、後期後半には愛鷹山麓を中心に直径十メートル程度の小型の円墳が多数築造されるようになります。富士市から本市にかけての愛鷹山麓は、東海地方屈指の古墳集中域です。また、小規模な古墳が密集する群集墳の造営は、市内のほぼ全域に及びます。南部地域の海岸沿いには、井田松江古墳群《戸田》や江浦横穴群《静浦》などがあり、海を生活基盤とした人々の墓と考えられています。こうした多数の群集墳の形成や豊富な副葬品から、この地域の繁栄がうかがえます。

古墳時代から奈良・平安時代にかけては、主に平地に集落が形成されるようになります。狩野川下流域の御幸町遺跡《第四》や千本砂礫州上には中原遺跡《原》など大規模な集落が形成されました。

7世紀前半までの市域とその周辺は珠流河国造、伊豆国造の支配領域となっていました。7世紀後半には盧原国造、珠流河国造、伊豆国造の領域をまとめて駿河国が成立しました。その主な範囲は静岡県中部、東部、伊豆地方であり、沼津は地勢的にも駿河国の中央に位置していたことから、天武9年(681)の伊豆国の分離後まで沼津の地は駿河国の中心的役割を担っていたという説があります。律令制のもとでは市域は駿河国駿河郡、伊豆国田方郡に属していましたが、沼津の中心市街地周辺は、駿河郡において地方行政の中心的な役割を担いました。上ノ段遺跡《第五》はその官衙に関連する遺跡で、地方での出土が稀な唐三彩の陶枕が出土し、中央との関係が深い人物の存在が考えられます。また、『和名類聚抄』に見える郡名である吉妾(棄妾とも。現西浦地区の木負に比定)や、この頃の行政単位であった「保」が使われた立保・足保《西



浦》などはこの時期に遡る古い地名です。

また、この地域に仏教をいち早く取り入れた遺跡も確認されています。日吉廃寺跡《第五》は7世紀後半に建立された私寺で駿河国では最古級の寺院と考えられます。全国的に珍しい上円下方墳の清水柳北1号墳《金岡》は、墳丘から石櫃が見つかったことから、仏教とともに広まった火葬によって葬られた人の骨を納めたと考えられています。



日吉廃寺塔址及び礎石（礎石を一部動かし保存）

市域では、稲作のほか漁撈も生活の基盤でした。海岸付近の遺跡からは土錘などの漁撈の道具が数多く出土しています。また、水産加工品は税として平城京にも送られました。平城京から出土した木簡には、市の南部地域の地名とともに、堅魚（鰹）が貢納されたことが記されています。これを裏付けるように、藤井原遺跡《第三》など当時海辺部に所在していた遺跡からは堅魚を煮るために使用したといわれる埴形土器が多量に出土しています。

平安時代の終わり頃には、末法思想の影響から経を筒に入れて埋納することが広がり、市内では三明寺経塚《門池》などが知られています。

（4）中世（鎌倉時代・南北朝時代・室町時代）【境目の地をめぐる争い】

平安時代後期から鎌倉時代にかけて、市域には大岡庄、金持庄、阿野庄といった荘園が成立したほか、南部地域には三津御厨が設置されました。古代の馬牧に由来する



伝阿野全成・時元墓（大泉寺）

といわれる大岡庄の現地支配を担っていた牧氏からは北条時政の後妻牧の方が出ています。阿野庄は、源頼朝の異母弟阿野全成が領地として与えられたといわれ、大泉寺《浮島》がその屋敷跡と伝わっています。沼津は、箱根路と足柄路の合流点としてなどの交通の要衝の性格があり、富士川の戦いの際には源頼朝が木瀬川宿に陣を張り、紀行文にも沼津宿、車返、原中宿などがしばしば登場します。

『吾妻鑑』には承元2年（1208）に鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市）の神宮寺造営用の材木を伊豆から切り出し、「沼津海」に積み出したと記されており、これが「沼津」の地名の初見です。沼津の津は港を表し、沼は浮島沼または狩野川河口付近の低湿地帯を示しているといわれています。この頃には、のちの東海道沼津宿の原型となる街道の中継地と狩野川河口の港湾機能を備えたまちが成立していたようです。



鎌倉時代、駿河国は北条氏の支配下にあり、大岡庄も北条氏が治めていたことが知られています。一方南部地域の三津御厨は、摂関家の九条家に伝領されていました。

南北朝時代に入ると、鎌倉府内の対立から失脚した関東管領畠山国清が三津城《内浦》に立て籠り鎌倉府軍と戦うなど、沼津周辺は数々の合戦の舞台となりました。この頃の沼津の領主は、建武3年（1336）の足利尊氏の執事高師直の下文から曾我時助であったことが知られています。また、三津御厨は浄光明寺慈光院、金持庄は後醍醐天皇の皇子護良親王、香貫郷は京都の寺院の領地でした。

長享元年（1487）、北条早雲こと伊勢守瑞は甥今川氏親の家督相続に際し功があり、興国寺城《浮島》を与えられます。その後、伊豆国の堀越御所（伊豆の国市）の足利茶々丸を攻め、伊豆国を支配しました。この後も、駿河国と伊豆国にまたがる市域は、境目の地として戦国大名の争いの最前線となります。特に河東一乱と呼ばれる今川氏と北条氏との争い、武田信玄の駿河侵攻による北条氏との争いにおいて、まちや社寺が戦火に見舞われています。



興国寺城跡

沼津を支配した戦国大名は今川氏、小田原北条氏、武田氏、徳川氏と変遷しました。当地域の軍事拠点は古くは興国寺城でしたが、現在の市街地中心部に武田勝頼によって三枚橋城《第一》が築城されて以後、徐々にその役割が移りました。また、海岸に築かれた長浜城《内浦》は北条水軍の拠点として整備された城郭で、北条水軍は武田水軍との間で駿河湾海戦を繰り広げました。この戦いによって、千本松原の一部が伐採され住民は潮風の害に困窮しましたが、増誉上人が念仏を唱えながら松を植え、やがて住民も協力して植樹に取り組んだことから、松林が今の美林になったという伝承があります。

市内の寺院の中には、中世まで開創伝承が遡るものもあります。蓮光寺《第五》は牧氏の館跡に建てられた道場が起源とされ、西光寺《第二》の木造阿弥陀如来三尊立像や禅長寺《西浦》の木造阿弥陀如来立像はこの時代のものです。ほかにも光長寺《門池》には数多くの寺宝、霊山寺《第四》には五輪塔・宝篋印塔などが守り伝えられています。

（5）近世（安土桃山時代・江戸時代）【東海道がもたらした発展と交流】

天正18年（1590）、豊臣秀吉によって小田原北条氏が滅ぼされると、徳川家康は関東に移封され、駿河国は秀吉の家臣中村一氏に与えられました。一氏は三枚橋城《第一》に弟氏次、興国寺城に重臣の河毛重次を配置します。関ヶ原の戦い後、中村氏は伯耆国（現鳥取県）に移封となり、三枚橋城には大久保忠佐、興国寺城には天野康景と徳川家臣が



封ぜられましたが、いずれもまもなく廃城となり、一時駿河藩領を経ながら市域の多くは天領または旗本の知行地となりました。安永6年(1777)、のちに老中となる水野忠友が沼津の地を与えられ、三枚橋城をもとに沼津城を築城して沼津藩が成立すると、水野家の統治は明治維新まで約90年間続きました。



帯笑園

慶長6年(1601)に伝馬の定が下され、全国的に交通網が整備されはじめると、市域には沼津宿と原宿が設置され、以後宿場町として発展します。特に沼津宿は中世以来の宿・市場としての役割、そして狩野川の河岸を拠点とした水運のための湊の機能を有し、交通・流通の拠点として繁栄しました。さらに水野家が沼津城を築くと城下町としても発展し、東海道を人々が行きかうことで市域には東西文化の交流が生まれました。原宿では、当地の大地主であった植松家がつくった帯笑園《原》が、東海道を通る大名、公家、文人墨客の交流の場となり、池大雅や円山応挙らの作品が植松家に伝わりました。また、原宿に生まれた白隠禅師は禅を庶民にまで広めた臨済宗中興の祖と呼ばれる人物で、松蔭寺《原》には白隠を慕った修行僧が全国から訪れました。また、本市には江戸時代の庶民文化を伝えるものとして、観音霊場や庚申講などに由来する石造物も数多く残されています。

江戸時代には内膳堀《第四》や牧堰《門池》などの大規模な灌漑施設の整備や助兵衛新田《原》など新田開発が相次ぎました。千本浜海岸では地引網漁が行われ、南部地域の漁村ではマグロなどの大型の回遊魚などを捕らえるため、津元(網元)のもと漁民が一致団結する建切網漁という独特な漁が行われました。また、石材産業も漁村の経済を支える重要な産業で、本市から切り出された石は江戸城(東京都千代田区)や駿府城(静岡市)などに使用されました。愛鷹山はもともと農村の入会地でしたが、古代の馬牧に由来するともいわれる野生の馬に注目した幕府により、寛政9年(1797)に愛鷹牧が設置されました。捕馬の際には周辺農民が動員され、山中には牧土手や捕込などの施設が現在も残っています。このような、当時の人々の活動の様子は地方文書・区有文書・役場文書などに記録され、現代に伝わっています。

この時代、町人の活躍も目立ちます。画家円山応挙の弟子植松季興(応令)や、沼津藩主に求められ馬の彫刻をしたといわれる彫刻師の舟仙、庶民教育では西間門《第二》の西尾麟角の活躍が有名です。

嘉永7年(1854)に起こった安政東海地震は、市域にも大きな被害を及ぼしました。小林《門池》では大規模な土地の崩落が生じ、下香貫《第三》では土地の陥没が起きました。その様子は沼津藩士の日記に鮮明に記録されています。また、海岸部には津波が押し寄せました。この時、下田で罹災したロシア船ディアナ号は、修理のための曳航途



中に富士市沖で沈没したため、プチャーチンらロシア使節一行は帰国のための代船（ヘダ号）建造を地元民と協力して戸田地区で行いました。その後も同型の船がこの地で造られ、戸田は日本の近代造船の発祥地といわれています。



ヘダ号進水図

（6）近代（明治時代・大正時代・昭和時代（戦前））【近代化と保養地】

明治維新により徳川宗家が駿府に移封され、沼津にも多くの旧幕臣が移住してきました。旧幕臣は江原素六を中心にフランス式軍制による陸軍将校の育成を目的として、沼津城跡に沼津兵学校をつくりました。その教育水準は国内最高といわれ、全国から優秀な人材が沼津に集まりました。このほか兵学校の附属機関として、明治時代初頭に洋式病院である沼津病院も設立しました。江原素六はそのほかにも兵学校附属小学校を元に集成舎（現沼津市立第一小学校）などの学校を設立して地域の教育の礎を築き、旧幕臣の授産のために牧場や茶の生産など産業を興して地域の発展に尽くしました。

廃藩置県後、沼津には郡役所や警察署、裁判所、学校などの近代的施設が整備されました。

明治22年（1889）には、東京・神戸間に東海道

本線が開通し、沼津停車場（現沼津駅）が開設されました。この影響で、旧沼津宿の旅籠屋は激減しました。しかし、鉄道開通によって東京からの交通の利便性が向上したため、温暖で風光明媚な沼津の海岸地帯は、避暑・避寒・保養地として注目されました。川村純義・大山巖・西郷従道や民間人の別荘に加え、明治26年（1893）には沼津御用邸が設置され、当時皇太子だった大正天皇や昭憲皇太后がしばしば訪れました。産業面では明治時代後半から南部地域で生産された西浦みかんの輸出もさかんになりました。

大正2年（1913）の沼津町大火、大正15年（1926）の沼津市大火により、沼津の旧市街地の大半が焼失しました。この復興のため、大規模な市区改正事業が行われ市街地は近代的なまちへと生まれ変わりましたが、このとき沼津城の堀などは埋められました。



沼津兵学校址碑



旧沼津御用邸西附属邸



大正5年(1916)、沼津^{まゆいちば}市場が開設されました。伊豆を含む本市周辺は温暖な気候のため全国に先駆けて早場^{はやばまゆ}繭の初取引が行われたことから、全国の繭相場を左右する重要な地となりました。本市には大規模な製糸^{せいしこうじょう}工場などの進出が相次ぎ、人口が増加して県下3番目の市となりました。

この頃の沼津には多くの文化人が訪れており、その足跡が石碑などに残っています。特に歌人若山^{わかやまぼくすい}牧水は、千本松原の景観に惹かれ大正9年(1920)に沼津に転居し、千本松原の伐採計画の反対運動の先頭に立ちました。また、作家の井上^{いのうえやすし}靖や芹沢^{せりざわこうじろう}光治良の作品には、この頃の沼津の情景が描かれています。さらに、地方出版も盛んで書籍や新聞が数多く出版されました。

昭和に入ると製糸工業は繊維工業に置き換わり、戦時体制下では軍関係の施設や軍需^{ぐんじゅ}工場の進出が相次ぎました。昭和18年(1943)には、沼津^{かいこんこうしやう}海軍工廠が設置されたため、終戦間近にはアメリカ軍の大規模な空襲に見舞われました。また、静浦・内浦・西浦・戸田地区には岩盤をトンネル状に掘削した特攻基地がつくられ、本土決戦の準備が行われていました。

(7) 現代(昭和時代(戦後)・平成時代・令和時代)

【商工業の発展と新たな取り組み】

戦後、芝浦^{しばうら}機械、富士^{ふじ}製作所などの軍需工場が民需^{みんじゅ}工場に転換して復興に成功すると、高度経済成長期にはリコーや明電舎^{めいてんしゃ}などの企業が相次いで沼津に進出し、工業が発展しました。空襲によって焼け野原となった市街地には、日本初の防火建築帯のアーケード街が建設されて復興し、百貨店の進出もあり県東部の中心的な商業都市としての地位を確立しました。このように本市では都市化が進む中、農村・漁村の面影は次第に薄まっていきました。

昭和44年(1969)には、東名高速道路が全線開通し、沼津インターチェンジが設置されたことで、伊豆半島の玄関口としての役割も担うようになりました。本市はごみ問題にいち早く取り組み、昭和50年(1975)には「沼津方式」と呼ばれる可燃ごみと資源ごみ、埋め立てごみを分別収集する取り組みが、日本で初めて行われました。

平成時代以降は、沼津駅前から商業施設の撤退が続く一方、郊外には大型商業施設が開店し、賑わいの中心が中心市街地から郊外へ移りつつあります。中心市街地の賑わいを取り戻すため、現在も鉄道高架化を中心とする沼津駅周辺の整備事業や駅前市街地の再開発に取り組んでいます。

交通面では新東名高速道路の開通、伊豆縦貫自動車道・国道414号静浦バイパスの一部開通、スマートインターチェンジの設置により、自動車の往来の利便性が向上しました。

一方、少子高齢化と人口流出による人口減少が続いており、まちの活性化のため沼津港などの観光、アニメ「ラブライブ!サンシャイン!!」の「聖地」、フェンシングなどを活かした取り組みが行われています。



2 ゆかりの人物【著名人や地域に尽くした人物たち】

本市の歴史には名を良く知られた歴史上の人物が関わっています。また、地域の歴史文化を守るために尽くした人物もいます。本市の歴史文化を語る上で特に欠かせないゆかりの人物を時代順に示します。

(1) 阿野全成 (1153~1203)

阿野全成は源頼朝の異母弟で、頼朝から当時阿野と呼ばれていた本市の西部から富士市の東部を領地として与えられ、井出《浮島》に居館を構えた人物です。居館跡とされる大泉寺《浮島》には、全成と子時元のものと思われる墓があります。全成の実績は記録ではほとんど確認されていませんが、下野国(現栃木県)で処刑された全成の首が一夜のうちに飛んできて掛かったという首かけの松の伝承なども伝わっています。

(2) 伊勢宗瑞 (北条早雲) (1456?~1519)

北条早雲の通称で知られる伊勢宗瑞は、元は室町幕府の役人でしたが、姉北川殿が駿河国の大名今川氏に嫁いだ縁から、甥氏親の今川氏の家督相続で功績をあげ、興国寺城《浮島》を与えられました。その後、宗瑞は伊豆国を平定するなど勢力を拡大し、小田原北条氏の祖となりますが、宗瑞ゆかりの興国寺城は長らく東駿河の拠点の城郭の役割を果たしていました。

(3) 白隠慧鶴 (1686~1769)

「駿河には過ぎたるものが二つあり 富士のお山に原の白隠」とうたわれる白隠禅師は、原宿で生まれました。松蔭寺《原》で出家したのち諸国での修行を経て松蔭寺に戻り、50年近くにわたって住職を務め、終生様々な方法を駆使して法を説きました。その中で最も知られているのは書画による教えで、民衆にも禅の教えが広まり、臨済宗中興の祖と讃えられています。今に伝わる臨済宗の禅の体系は、元をたどればすべて白隠禅師の教えにたどり着くとされています。



木造白隠禅師坐像

(4) 江原素六 (1842~1922)

幕臣であった素六は、明治維新の後、徳川宗家の駿府移封に伴い沼津に移住しました。旧幕臣と協力して沼津兵学校《第一》など近代教育の先駆けとなる学校をつくり、人材の育成に努めました。また、旧幕臣への授産のために西洋式の牧畜、茶の栽培と輸出な



どの新たな事業を起こし、国有化された愛鷹山の土地を地域に取り戻したのも大きな功績です。その後、駿東郡の初代郡長や衆議院議員・貴族院議員などを務め、本市のために尽力しました。

(5) 若山牧水 (1885~1928)

歌人として有名な若山牧水は、大正9年(1920)に一家で沼津に移住してきました。沼津の風土、とりわけ千本松原の景観に魅せられたといえます。静岡県が千本松原の一部を伐採して財源にすることを計画すると、地元の反対運動の先頭に立ち新聞各紙を通じて反対を訴え、計画は中止になりました。昭和3年(1928)9月にこの世を去りますが、市内各地には牧水の歌碑が建てられています。

3 災害の履歴【地震・大火・風水害との戦い】

本市は長い海岸線を有しているため、津波や高潮などの被害を度々受けてきました。市内には、河川流域・低地での洪水、山間地での土砂崩れ、市街地での大火など、数多くの災害の記録が残されています。本市の歴史文化を語る上で欠かせないものであるため代表的な災害を示します。

(1) 安政東海地震

嘉永7年(1854)に発生した大地震は、市域に土砂災害や津波などの大きな被害を及ぼしました。沼津藩士が記録した「嘉永七甲寅歳地震之記」によれば、沼津城下では家屋の倒壊が相次ぎ、小林《門池》では大きな土地の陥没が発生し、12軒の民家が飲み込まれました。下香貫《第三》では液状化によって水田から水が噴き出し、一帯が湖沼となってしまいました。こうした被害から、「下田流れて沼津は落ちた」の諺ことわざが生まれました。また、南部地域の村々には津波が襲来し、漁猟用具がごとごとく流されたといえます。



『嘉永七甲寅歳地震之記』『小林村変地之図』

光明寺《内浦》のお堂の柱には、その時の津波の高さが残されています。この安政東海地震の津波は、古文書などの記録や伝承が数多く残っているため実際に襲来した津波高が復元できることから、現代の南海トラフ地震における想定津波高の基準となっています。また、下田港に停泊していたロシア使節の乗艦ディアナ号は地震の津波で罹災したのち曳航中に沈没してしまい、戸田で代替船の建造が行われました。



(2) 明治～大正の大火

本市の中心市街地では近代に入って大きな火事が2度起きています。大正2年(1913)3月には1,468戸、昭和改元直前の大正15年(1926)12月には761戸を焼失しました。これらの大火ののち、市街地では市区改正(区画整理)が推進されることになり、沼津の市街地は近代的な都市へと進展していきましたが、一方で沼津宿や沼津城などかつての面影の多くは失われてしまいました。

明治から大正時代にかけては市街地以外でも大火が相次ぎました。我入道《第三》では大正13年(1924)、西浦地区では明治15年(1882)、25年(1892)、40年(1907)に大火が発生し集落が焼失しました。これらの火事がきっかけとなり、西浦地区では民家の屋根の草葺きから瓦葺きへの葺き替えが進んだといわれており、石蔵が多いのも火事の教訓によります。

(3) 川や沼の水害

狩野川は古来、度々水害が起きており、その記録が残されています。特に昭和33年(1958)に伊豆半島を直撃した台風22号いわゆる狩野川台風は、狩野川上流域の各所で山崩れを発生させ、中・下流域では堤防の決壊や、流木などが引っ掛かり川の水をせき止めていた橋梁の崩壊によって大規模な洪水流が発生し、狩野川流域で死者・行方不明者851名の戦後最大級の被害を及ぼしました。これ以降、狩野川流域の堤防の整備などが進み、狩野川台風以前から建設が始まっていた内陸と静浦地区の口野をトンネルで結ぶ狩野川放水路も、計画を変更して規模を拡大し昭和40年(1965)に完成しました。

また、浮島沼があった浮島低地は冠水しやすい地域であるため、大雨のたびに水害が発生し、時には田の稲が根ごと流されることもありました。低地の排水を良くするため、度々排水対策が試みられ、昭和18年に^{しょうわほう}昭和放水路《原》、昭和38年(1963)に沼川第二放水路《原》が完成しました。現在も新しい放水路(沼川新放水路(仮称))が建設されており、洪水被害を少なくする対策が進められています。



狩野川放水路(口野トンネル)

(4) ^{たかしお}高潮被害

地震による津波同様、沿岸部に被害を及ぼすのが台風や低気圧による高潮被害です。江戸時代の初め、原地区周辺の東海道は今よりも海岸近くを通過していましたが、原宿が高波による大きな被害を受け、慶長14年(1609)にそれまでより北側に東海道が移設され、集落・宿場機能も以前より北に移転したといわれています。この地域では、高潮による被害を食い止めるため、^{しおどて}潮土手という堤防が造られ、今でも一本松以西に残っています。